

現代教育の理想像としての安藤孝行 Takatura ANDO as Ideal Model of the Modern Education

日下 耕三
Kozo Kusaka

キーワード：翻訳 唱和 哲学者 詩人 教養 旧制高校 科学 実証 理性 批判力 生きる力

I. はじめに

われはたち孤高の道を歩まむところひそかに思ひそめしか（安藤教授の二十歳の回顧）

後年の『科学者と哲学者の対話』⁽¹⁾は安藤教授の英文著書を読んだ海外読者との十数回の文通からなったものであることを考えると、文字通り海外にまで開かれていくグローバルな孤高の覚悟であったことが分る。

この覚悟という能動的意識に始まる自律性が教育の要諦であろう。

加えて「人間と文化に対する深き愛情のやみがたき要請」⁽²⁾を内に秘めた生涯は、「生きる力」⁽³⁾の体現者の感がある。

更に創造性はどうすれば身につくのか、その条件は

「すべて独創的な精神は、懶惰の効能を識っている。なぜなら懶惰は創造の母だからである。

勤勉は仕上げをする。しかし決して創造しない。

哲学に必要なものは閑暇、閑暇、また閑暇。」『エピクロス園』といている。

恩師の晩年、聲咳に触れた者として、その人となりを安藤教授自身と関係者の文章等で紹介する。

私は先生の人格形成の主要因を、母親と学校教育とりわけ当時の旧制高等学校に求めている。「地震・雷・火事・おやじ」が死語ではなかった時代には、教育環境という面からみて父親の影響、これも大きかったと思うが不明である。加えて休学という内省、内観の時も大きな影響の体験と考えられようが、資料から明らかにできるものはなかった。それらの仮説のもとに人物像として特徴的と思われる資料をあげたい。まさに恣意的な牽強附会である。厳密に引用出典をあげてもいいないが、これもお許しいただきたい。客観的資料は主として『存在の忘却』の略歴による。美意識を作るのは体験であるというなら、先生は、その体験に恵まれた環境に生まれたといえよう。

⁽¹⁾ 安藤孝行『科学者と哲学者の対話』理想社1966年p10 科学の基礎を實在に求め、思弁より感官を信頼する立場から、カント、ボリヤイ、ヒルベルト、プランク、ブール、ハイゼンベルクら12人のいわゆる観念論の科学者の批判の依頼に始まる。

⁽²⁾ 安藤孝行『絶対他力の哲学』東西文庫1948年p2

⁽³⁾ 梶田叡一『〈生きる力〉の人間教育を』金子書房p5・25 中央教育審議会答申にある。これを著者は年齢に応じてやるべき「主体的能動的な学びの力」「豊かな人間性」「基盤的なエネルギー」と換言する。

加えて、伝記的小説『当世畸人伝』の若干の誤りも訂正したい。此度幸い立命館時代の学生岩井允子氏（現在満96歳、当時同志社大学助手で安藤先生の英文著書 ARISTOTLES' THEORY OF PRACTICAL COGNITION の索引を作成）と長女小沢真奈氏の証言を得ることができた。

Ⅱ. 遺著『存在の忘却』に寄せられた序文

1、山田晶氏から

「安藤孝行先生はユニークな哲学者であった。

先生が京都大学に入学された頃は、哲学科は田辺元先生の全盛時代であり、弁証法にあらずんば哲学にあらずという雰囲気、教室にみなぎっていた。その中で安藤先生は敢てアリストテレスの原典に取り組み、アリストテレスを専攻された。

大学院で研究をつまれた後に、先生は金沢の四高に赴任された。

終戦後、先生は立命館大学に招かれて、また京都に戻ってこられた。世はマルキシズムと実存哲学の時代となっていた。先生は、キェルケゴール、ハイデガー、サルトル等、実存哲学の英雄たちに対して齒に衣を着せぬ批判をあびせかけたのみならず、マルクスの弁証法をも批判した。

では、これらの哲学を批判した先生ご自身の立場とは、いかなるものであったか。それは『存在論』であった。

しかし『存在論』というだけでは、あまりに漠然としている。実存哲学もヘーゲル哲学も、ある意味でやはり、『存在論』である。先生によつてたつ『存在論』はアリストテレス的存在論であった。事実、先生は、アリストテレスについての専門的研究書を数冊出版し、それによって文学博士〔東京大学〕の学位を取得しているのである。

しかし、アリストテレスの存在論というだけでも、あまりに漠然としている。トマスもヘーゲルもハイデガーも、或る意味でみなアリストテレスにもとづいて自己の存在論を立てているのである。……

先生が年とともに興味をもって研究されるようになったのは、西洋中世の存在論である。すなわち、スコラ哲学の存在論である。おそらくその興味からして先生は、聖トマス学院のプリオット神父と近づきになられた。私がはじめて先生にお会いしたのも、聖トマス学院においてであった。」

では先生は「『トミスト』であったか。断じて否である。先生がトマスに関心を抱かれたのは、あくまでも『存在論的』関心からであり『神学的』ないし『宗教的』関心からではなかった。先生は神学と哲学を峻別し、信仰は哲学者の関わるべからざることとした。そしてご自分はあくまでも『哲学者』であると自負しておられた。それゆえ先生は、ご自分の存在論的関心から、中世の存在論に興味を持たれたが、しかしスコラ的アリストテレスの存在論を自己の立場としたのでもない。……

古代ギリシアに始まって現代にいたる哲学史上の巨人たちの著作を、先生のように原典で読破した学者が日本に幾人いるであろうか。……先生はこれらの哲学者の著作に対し、仮借ない批判者として対決する。先生は読みながらたえず著者に向って問うてゆく。『これはおかしい』、『これは不合理だ』、『こんなバカなことがあるか』と怒り出す。こんな読み方でデカルトを読み、ヘーゲルを読み、キェルケゴールを読み、フッサールを読んだ人が、これまで日本にいくたりいたであろうか。」「おぼろげながら先生の『存在論の立場』の性格が分ってきた。……ヴォルフとニコライ・ハルトマンに近いのではないか。すなわち、Ontologia rationalis が先生の存在論的立場ではなかったか。その中世的祖先は、トマスではなくスアレッツである。先生のいう『存在』は、トマスの『エッセ』ではなく、スアレッツの『エクシステンチア』である。』……

カントが伝統的形而上学と考えたものは、この系譜に属する存在論であった。

安藤先生は安藤先生としての存在論の探求を、ごまかすことなく一途に正直に貫かれたのであり、そのような一生そのものが、かけがいのない存在論的意味を有している。……」⁽⁴⁾

2、武内義範氏から

安藤孝行君の思い出

「安藤孝行君と私は、ともに昭和8年京都大学文学部哲学科に入学した。当時の京大哲学科の学制では二回生の時に専攻を決めることになっていた。彼も私も勿論哲学専攻を選んだ。二人とも京大に來たのが田辺元先生のもとで哲学を学ぶことであったから。安藤君は名古屋の第八高等学校の出身で、八高時代に佐竹哲雄先生からフッサールの現象学を中心にした哲学概論を学ばれたということであった。……

二回生になった時、われわれは田辺先生からアリストテレスの『形而上学』の数章を一年間に精読するように命ぜられた。ロッシの英訳本でよいとのことであったが……安藤君はギリシャ語の勉強に熱心にとりかかられた。私は英訳で……だけだったが、安藤君はあの製本のしっかりしたオックスフォード版のアリストテレス全集の *Metaphysics* を文字通り読み破って、その年の中にバラバラにしてしまった。……

昭和十一年に大学を出てからも、昭和十六年安藤君が金沢の第四高等学校教授に就職せられるまで、わたしたちは大学院の学生として勉強をつづけた。それで毎週二回か三回、学校か彼の家で話し合わないことはなかった。高等学校時代に病気で休学したので、君は私よりも少しく年長だった。この差は思想的のものでもあったので話し合っている時には安藤君の方が自然に兄貴といった顔つきになり、いつも結構楽しく、時間のたつのを忘れて哲学や芸術の話に耽った。今から思うとそれは私にとって最も有益な、また楽しい青春の日々であった。……

ただ読書の感銘や印象をのみ、とりとめなく考えていた私にとっては、この堅実な学問的態度はよき他山の石であった。ヘーゲルの『論理学』、カントの『実践理性批判』、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』、デカルトの『方法論序説』等を私たちは安田君、安藤君と共に読んだ。安田、安藤君の正確な語学の力と綿密な思想の分析は常に群を抜いていた。……」

「私自身の個人的思い出になお恥けことを許されるならば、『存在の探求』がとくに印象深い。私が最後に田辺先生にお目にかかったのは昭和35年で、……その時先生は東大に出された安藤君の論文の話をされ、また最近の君

⁽⁴⁾ 安藤孝行『存在の探求』公論社1980年「トマスの *actus essendi* を如何に解するかが、われわれに課せられた問題として、*esse* の第一活動態として、これを西田哲学の場所の概念に接近せしめる山田説に対して、むしろ存在する活動と解するジルソン説に加担するものであった。」とある。これは、20世紀における哲学、哲学史の最良の書、ジルソン『存在と本質』安藤孝行訳3ffに発展する。

教授は、「約半世紀の哲学研究結果で、百人に一人も賛成者はいないかもしれないが、最大の哲学者は彼ジルソンであるというのは何の誇張もない真情である。」という。「ひとびとが彼にふさわしい評価を与えないのは、大部分偏見と無知のためであると思う。」「しかし唯一人の例外がある。京大の山田晶教授は我が国の中世哲学史研究の最高の権威であり、私の最も尊敬する友人であるが、唯私が遺憾に思うのは、ジルソンの哲学思索の深さについて私と評価を異にされ……ることである。山田教授が、ジルソンにまさって信仰の人であるためではなからうか。しかし教授がジルソンの最高傑作は1932年の「中世哲学の精神」であり『晩年のジルソンは奇妙なトマス解釈に傾斜し、それに凝り固まっていた。晩年に書かれた多くの著作はいたずらに量のみ膨大にして内容の乏しいものになっていった』と言われるのは到底同意出来ない。もちろん私もジルソンを完全とは思はないし、特に彼の *existential* に対する教授の批判の正しさを認めるのにやぶさかではない。しかしそのことは決して彼の晩年の作の価値を減殺するものではない。私は教授の『奇妙なトマス解釈』といわれることの真意の理解に苦しむ。もしそれが *actus essendi* としての *esse ipsum* の発見であったら、それを否定することはジルソンの功績の大半を否定することに止まらず、教授自身のトマス解釈の基礎まで突き崩すことになるのではなからうか。」先生のライフワークは「これを以て万事足れりとするわけではなく、ここに百尺竿頭一步を進める」ことであった。

の諸論文を（それが後に『存在の探求』となった）を推奨され、特にアリストテレスを扱った部分が出色だと言われ・・・読んでみるように推奨された。・・・先生があの日、安藤君のことを語るときの喜ばしげな顔を忘れることができない。」

「安藤君は芸術的にも多芸多才な人であった。長女の真奈さんに捧げられた画集 Creationism（創造画集）（1982年）をはじめ、西欧の詩、漢詩などを・・・和訳されたものが数多く存在する。・・・『唐詩唱和』や『るばいやあと』の中には一読忘れえぬ響きのものがある。自作の俳句や和歌は夥しい数にのぼって、日本画も素人離れどころか、専門画家離れの逸品もある。私が君の死後ご遺族からいただいた白梅の図はそのようなものの一つで、今も香りが室内に漂うような凜とした気品を備えている。」

Ⅲ. 経歴と著作

「哲学に必要なものは閑暇」とあったが、一般には時間のゆとりを生み出すものは、生活のゆとりで経済的なゆとりが条件であろう。

戦後の法制の改革で、不在地主の先生は、5町歩しか許されなかったという。（岩井氏談）先生は「土地はそれを耕す者のもの」と考える人であった。但しそこにつまらない建物が建ったりしては失望したそうである。裕福な階層に生まれたことは間違いない。

明治44年（1911年）愛知県生まれ、

明倫中学から昭和4年第八高等学校文科甲類に進む。

昭和8年京都大学に進み、昭和11年同大学院に進む。

昭和16年第四高等学校教授、昭和24年金沢大学助教授・昭和26年教授から、昭和28年立命館大学教授、昭和42年から岡山大学教授そして昭和52年（1977年）定年をむかえる。

師には哲学関係の16冊の著作（英文著作3冊を含む。うち、Metaphysics は第一回日本翻訳文化賞を受賞）と3冊の翻訳（ギリシャ語、ドイツ語、フランス語）と唱和文芸の5冊（漢詩2冊、英独仏の名詩訳1冊）さらに1冊の画集（英訳文付）がある。

Ⅳ. 著作の内容から

1 『アリストテレスの倫理学』

昭和15年（1940年）刊の新書版『アリストテレスの倫理学』（弘文堂）が著作では最初のものである。序には、体系的総合的理解の必要性和、そのための文献学的研究と哲学的批判の必要性が述べられている。これはほとんど市中に出ることのなかった幻の書である。京都帝国大学（京大）大学院生の時のものである。

約35年後に岡山大学に移っていた時に、この書を覚えていた河出書房新社が先生に再刊を願ったものでもある。

2 唱和文芸と翻訳論

その頃から先生は哲学のライフワークに並行して、唱和文芸に取り組む。その唱和という詩の翻訳法のことを知らせたい思いが最期まであった。あるいは一番強かったのではとも思う。

唱和とは「翻訳に非ず、あまりに原文に忠実であるよりは日本人の感性に快く受容できるほどに・・・韻なき

日本語の詩型の中でせめて律を活かし和歌訳した私の訳詩を翻訳と呼ぶよりは唱和と呼ぶ」とある。

東大比較文学会刊の比較文学研究の第42号には

「私は哲学を専攻する老書生であるが、10年ほど前から、和歌による漢詩の翻訳（案）という余技を始めて、『唐詩唱和』『唱和の遊び』という両著によって、漢詩約800篇を和歌訳し、最近はその続篇として、杜甫と蘇軾の詩200余篇を訳した『杜蘇唱和』、さらに、英、独、仏の詩77篇を訳した『葦の葉笛』という訳詩集を自費出版した。優劣はしばらく問わず量的に言っても一応は詩人、或は少なくとも訳詩家と自称してもよさそうに思う。しかし悲しいかな、専門家化の進んだ現代社会では、昔の文人というような観念は通用せず、学界からも、文壇からも殆ど無視されて来た。」とある。

公刊された論文では次にあげる、比較文学研究の第46号「詩の翻訳再論」が絶筆、1984. 1. 4 の日付がある。

翻訳を軽視する〔及川氏〕への反論である。「つまらない創作をする作者はいくらでもいるが、立派な翻訳の出来る人は、さらに居るものではない。……ちゃんとした翻訳をするには、すぐれた学識が必要である。それもただ語学ができるだけでは足らず、すぐれた文才がなければならない。」この類比を詩人と音楽家に適用し「たしかにボオドレエルという詩人が居なかったら『悪の華』の翻訳はできないだろう。同じようにヴィルヘルム・ミュラーという詩人がいなかったら、シューベルトの『美しき水車小屋の乙女』とか『冬の旅』というような名歌曲集もできなかったにちがいない。だからといってシューベルトは、ミュラーの下僕にすぎないと言えようか。シラーの『歓喜の歌』を第九交響曲にとりいれたベートーベンは、シラーの執事にすぎなかっただろうか。」と同時に、歌麿や広重の肉筆画と版画では、「彼らの肉筆画は、その版画のような美しさをもっていないことは、その道の通なら誰しも知っていることである。」という。

鴎外の『即興詩人』や上田敏の『山のあなた』の訳詩は原作より優れているとし……「少なくとも翻訳の理想は原作に劣らぬ作品を作り出すことであり、それは翻訳者の義務でこそあれ、越権ではない。せめては翻訳者の身分も原作者の友人ぐらいにひき上げてほしいものである。それでなければよい翻訳はえられまい。」

いまひとつ言い残したこととして、「五七や七五調以外にも韻律は全く不可能とまでは断言しない。美しい口語文の洗練も大いに結構だと思う。反面七五、五七調ならすべてが詩だとも思はない。」という。

納得できないものについては、徹底して反証を挙げる。『アエネース』の訳者を安藤教授は優れた言語学者だったがと具体的に名前も挙げて、その詩的才能には欠けていたと明言する。また大学で古典語を教わった先生ももうひとつ輪をかけたようなひどい日本語をつかわれたと述べる。それは原文に忠実すぎたためでもあるという。

さらに「ともかく私の尊敬していた先輩をけなすのは心苦しいことだが、アリストテレスではないけれど Amicus Socrates, amicus Platon, sed magis amica veritas というわけで、私にしても、師を愛し、友を愛す、されどいやまして詩を愛する者として黙視するわけにゆかない。」となる。

その手厳しさは、先輩の訳作に「東大英文出の秀才ともあろう方が、パンドラの箱を開いたら希望が去ったというお話。はて……首をかしげて……おそろおそろ原文を見ると、ちゃんと Hope was left, Was she not? とある。やっぱり残ったんですよ先輩。こんな話は小学生でも知っているし、was left が去ったではなくて、残った位のことは中学生でも間違えまい。Flow は流れるに違いないので……あながち誤訳とは言えまいが、the flow of soul には和気あいあいの交歓……という特殊の意味がある。……原語は Hebe である。ヘーベはゼウスとヘラの娘で固有名詞……それでは、どういうわけで女神らと複数形になさったのか。ここで欧米文学の学生さんたちに老婆心から忠告しておきたいのは、『聖書』と『ギリシャ・ローマ神話』だけは必ず一読しておく

こと。さもないと思わぬ恥をかきますよ。」と言って自分の定型の訳を披露される。自信がある証拠であろう。

・・・「念のためにことわっておくが、私は京大出だけれども、いわゆる京大学派なんかとは無縁だし、東大には御恩こそあれ、恨みなど毛頭ないから、江戸の敵を長崎で・・・など思いも及ばないということ。・・・必ずしも及川氏の言われるようにアエネース訳が『詩の内容という大切なものを、あやまった音楽性獲得のために犠牲にした最悪の場合』というわけでもなさそうだとはいったかっただけである。」

「そもそも詩とか小説などを文学と呼ぶことが誤解のもとで、それはむしろ文藝と呼ぶべきであろう。おそらく真面目な学者であられる及川氏などは、遊びという語そのものに反発なさるかもしれないがいわゆる文藝は風流であり、風流とはとりもなおさず遊びである。」

3 『唐詩唱和』と自作歌集

昭和47年刊の『唐詩唱和』が文芸書公刊の端緒で、原詩および註解も付けたものである。その序文には「齡耳順に垂むとするや卒然として作歌に向かひ」とある。自作第一歌集「白金の手篋」が併録。白金の手篋という名にして、心臓を入れるものと聞く、死を意識したものに違いない。

「うつし世の想いをこめししろがねの手ばこ一つをのこしゆかばやの意なり。」

自身の百首のなかの数種だけあげる。また当時訳詩の一首が旺文社（？）の漢文の教科書に取り上げられたが、もっと良い作品があるのと言われたことを思い出す。

自負

うそぶけば息吹さながらうたとなるわが言霊のさやかなるかも

自嘲

かにかくに三十一文字をつらねなば歌なりけりとおもふおろかさ

田井の浦

波立たぬ入江もとめて住みけれどなほふきやまぬ峰のこがらし

思惟の思惟か涅槃^{すがた}の像か内海はひねもす風ぎて光かがやく

桂濱岩うつ波に碎かれて月は黄金の玉とちりける

讃岐なる津田の松原そのもとに幾世の人が物おもひけむ

花くたくいたくなふりそ新墓の猫の柔毛に滲みやとほらむ

唱和文芸の残り二冊は『唱和の遊び』と『るばいやあと』である。

4 『唱和の遊び』は漢詩・俳句・短歌・連歌を含み持論の文学論が述べられている。最後には、「連歌俳諧の道すたれ戦国武将明智光秀百韻、今川氏親、出陣千句の雅懷にこころ動きこれにならひて五月百韻を独吟せり」とあって、連歌を披露している。歌会を持ちたかったのである。意識してか

いまの世のうたよみどものをかしさよ口くぐもりてしたりがほなる（唐詩唱和）が出るのであろう

5 『るばいやあと』ペルシャの詩人の詩の和歌訳「百数十首を一気に二日間で読んだ」という歌には哲学者の一面

も出ている。

みかづきは空にかかれりやがてわがうなじを斬らんとがまのごとく(19)

あらましの罪とけがれのきたるてふ土よりなりしみをいかにせむ (30)

存在と無と現象の認識もなどか及ばむこの酔いごち (99)

V. 旧制第四高等学校の教授として

八高を卒業された先生は、同じ四高の教授になる。ナンバースクールは超エリート校なのである。

読者のなかには、70年あまり前日本には、女子は入学が許されない旧制高等学校というものがあったこと、終戦とともに大学になったことを知らない人も多いのではないか。

小学校にもいけない人がいる一方で、ドイツ語や英語が読める教育がこの高等学校ではなされていたのである。⁽⁵⁾

筆者は戦後の混乱期の生まれである。筆者の知る範囲でも、経済的な面が大きいとその余裕があっても、子どもの義務教育以上の進学は親が真剣に考える問題であった。親しく接してくれる近所の老人の中には、読み書きができない人もいた。特に女子は、読み・書き・計算（そろばん）以上の学識（学問）などより、家庭に入っの、家事一般（出産・育児を含む）ができることが優先されたように思う。

筆者の幼少期には「戦後強くなったのは、女性と靴下」との揶揄もあった。新憲法の「民主主義」「男女の本質的平等」は小・中学校でうたわれていたけれど、女子に高等教育は不要との考えも多くあった。高校進学も男子の進学率に比べかなり低かったように思う。

ちなみに小生の学校は地方の公立中学（新制中学）であった。社会科の授業で憲法前文の暗唱が50名を超えるクラス全員ができるまで続けられた。2～3週間で全員できたように記憶する。

憲法前文が全員言えるようになったのも驚きなら、今日これが常識になっていることでは、上部構造の変化で社会は変わることの検証実験だったかもしれないと思う。

一方、安藤教授は日本の社会が、そうなるように意識を高めるべく金沢で論陣を張っていたことが『絶対自力の哲学』で分る。「昨日の軍国主義者と、今日のアメリカ民主主義の賛美者」の間の精神構造にどれほどの違いがあるのかと、「自主性なく時の勢力に従っているだけだ」と、「民主主義といいながら、奴隷根性を脱却していない」と。「自由人は主人を持たない、ただ友と同志を持つだけだ」ともいっている。

終戦と学制変更の時、どうだったか。「アンテツさんは授業の中で、戦争遂行に血道をあげている軍部やその周辺の評論家、新聞に対して皮肉を言われることがあった。これは当時としては珍しいことであった。当時の四高教授の大部分は、時局に対して完全黙秘をしているか、一、二の神がかり的教授がいるだけだったからである。」⁽⁶⁾

⁽⁵⁾ 明治の新政府の教育政策では、多くの外国人教師による外国語の教科書の使用を認めたが、20年～30年のうちにすべて日本語のものになったという。驚くべき礎地と、語学（翻訳）教育がなされた成果と言わなければならない。それをうかがわせるのが、旧制高校のカリキュラムである。そこでは、全学年（1・2・3）ともに語学の占める時間は、13～14時間であった。文科甲・乙とも英独の時間比重は違うが1週33時間の中で、それらは三分の一以上を占める。

甲では英語9時間でドイツ語4時間、乙では、ドイツ語10～11時間で英語4時間が3年間にわたってなされる。

ちなみに、哲学教授に関して言えば2年次または3年次に論理学2時間哲学は3時間を担当したものと思われる。

その他、修身は1年次～3年次まで各1時間で、それぞれ、実践道徳、国民道徳、倫理学が配されている。国語漢文が、各学年5～6時間。体操は、各学年3時間であった。

その理性的な批判は、対象が恩師であっても、その道の権威であっても変わらない。内容が、時代のホットトピックであっても、道徳や宗教から詩の翻訳といった文芸に関するものでも変わらない。しかも、納得できるまでラディカルに。

学制変更があり、やがて先生は金沢大学助教授・教授を経て、立命館大学教授となる。ここで、岩井氏の言葉を引用したい。「その頃は終戦後すべての教員の再教育が行われていた。何しろ憲法・教育基本法が1945年の終戦後変わったのであるから、それに基く教職員は全部仮免状となり、再教育を受けねばならなくなったのである。その需要を満たすべく、多くの大学が夜間部（二部）を設けた。私もさっそくそういう所で学び直すべく、近くの荒神口に設けられた立命館大学の二部に行って遭遇したのが安藤孝行教授であった。」

VI. 畸人とは博識の貴人のことでは？

実は、『当世畸人伝』の影響で、変人のイメージが一部にあることに驚き、白崎氏から取材された者として、それを払拭したいと思う。日常生活では、常識的な人であったことを岩井女史の言葉も借りて述べたい。此度、岩井女史から「安藤先生は実に話題の豊富な方で日本や中国の古典も、巷間の流行も良くご存じで私は参上するたびに……酔いしれた。」「先生から多大のお教えを受けたことを数え97歳の今日、なお感謝賛美の想いを禁じ得ない。」「先生は全く私の知っている凡ての人にまさって、博識・博学の人であった。今なおこの方にまさる人物には逢ったことがない。」同時に、「また母堂も実に話題の豊富な女性で、戦前、戦中、戦後の地方の風俗の変遷などさりげない話しぶりでよく語って下さった。」と知らされた。

筆者も94歳の母堂にお会いした。明晰な頭脳と気品あふれる方で喜んで写真を撮らせてくださった。同時に宗教に対する厳しい批判者との印象がある。先生は、民主主義はやがてそれにふさわしい道徳を作るとして、家族制度の崩壊を視野に入れておられた。今日の老人と乳・幼児の介護保育といった社会の責任の問題である。しかし、日常は違って大変親孝行な方と感じた。それを示す歌がある。

朧夜の梨より白し母が舍利抱きまゐらす古希のふところ

朧夜のいつとはしらずしらしらに吞まばのみてむ白き仏舍利

先生のことで思い出すことは、イメージは「大学は学問をするところ、それができないなら研究をしななければならない。」勉強は高校までに、語学なども自分でという姿勢。学生を自分の仕事では使わない。就職の世話は一切しない、むしろしてはいけない。悪法も法として守らなければならないと考えていた等々である。

唯、関西哲学会のタイムキーパーをしたとき、発表者の発表を一番前できちっとした背広姿で真剣に聞き質問される先生の姿を記憶している。哲学の質問なら何でも喜んで応じてくださることは、学生はみんな知っていたが、質問できるレベルに理解が達していなかったように思う。私に関して言えば、難しすぎると歌の感想を言っは、早く余技（遊びを）やめてもらおうとしていた記憶がある。マルチな才能が信じられなかったからである。

プラトンの洞窟の比喩を知らなければ解けない人格であるようにも思える。

普段の先生は、玉野のスーパーで買い物をしたり、4か月の赤ん坊の手を取ってあやしたり、作詞した寮歌をもって名古屋に同窓会で来られた時は、「やっとかめ」という言葉を知らなかった私をその名のうどん屋に案内してくださるユーモアの人でもあった。

(6) 安藤孝行は一貫して論理の人というのは高等学校の教え子 西義之氏の証言である。『存在の解明』p155

『当世畸人伝』で書かれている、ご長男の無知識も間違いなら、先生がスピード違反していたことになっているのも間違いである。先生から「制限速度が40kmのところをきちっと守って走っているのに、ダンプカーが次々に抜いていきながら怒鳴るのはなぜ」と質問されたことがあった。真相は、ご長男が、手紙で、「ダンプカーに抜かれつ、抜かれつ」と書いたのを、白崎氏は「抜きつ、抜かれつ」と読んだため、私は訂正を要求したが完全には消されなかった。研究室でニコマコス倫理学の演習があったのは事実であるが、高校生の話は、全くのフィクションである。教授会のことは今となっては確かめられないが、私は違うと思っている。副手制度の廃止を申し訳ない様子で伝えられたことがあった。やれやれと一言いわれたことがあった。「あきれた論理でも、憤懣を吐くのは自由人の取るべき道ではない。」先生は学生と副手は峻別、ご自身の本の校正など副手になるまで一切させてもらえなかった。

伝記的小説の内容は、白崎氏の筆力で書かれたためか、嘘も何度も読んでみると本当のような気がしてくる。

VII. 四高の授業回顧と教科書『総合科学としての哲学』について

先生は批判（哲学）の人にして、詩人（翻訳家）。これまでから我々は一つの人格のうちにある強靱な意志と繊細さの同居を確認させられた。本稿が研究ノートであることを肝に銘じて引用と考察を続けよう。

さかのぼって、1941年の秋、太平洋戦争の勃発の直前、師は金沢の第四高等学校に哲学の教授として赴任する。主として哲学と論理学を講じる。西田幾多郎博士以来三代目とかで、京大の先輩から哲学のイェルサレム〔メッカ？〕に赴任する光栄を祝福されたものだという。⁽⁷⁾

学生側からのエピソードは、「旧制四高の二年生のとき、私たちははじめて安藤先生を教壇に迎えた。担当は『論理学』でなかったかと思う。先生の噂はだれからかすでに伝えられていた。京大の田辺元博士門下の『たいへんな俊才』である等々。私は先生の第一時間目の登場ぶりを今でもはっきりと思い出すことができる。」「安藤先生には『安哲』という綽名が奉られた。講義はいよいよ難解をきわめ『アンテツはどうも俺たちを大学生だと誤解してるんじゃないかなどとばやくものが出はじめた。しかし難しすぎますよと抗議するわけにもいかず、学期末試験となり、大注、小注（注は注意点）が続出した。』⁽⁸⁾・・・

「西田幾多郎先生と同じ教壇に立つことは嬉しく光栄だと挨拶したが、先輩たちの祝福も、もちろんそれはおそらく単なる外交辞令にすぎない」と思って、「この奇縁についてそれほど深い感激を味わったわけでもない。」西田学派の亜流を以て自任していたのではないというのがその理由である。「しかしながら博士の盛名は、とりわけその郷党にとっては眩惑的であって、私は、折にふれてこの光栄を再認せしめられずにはおかなかったし、ひいてはそれが私の自戒の一助となったことも否定できない。」とこれは『総合科学としての哲学』にある述懐で、『絶対自力の哲学』とともにナンバースクール四高学生の講義用の教科書となったのである。この時の感慨を少し長くなるが続けよう。

「40年の歳月をへだてて同じ教壇から、同年配の教師によって、同年配の学生に向かって語られた講義案〔西田博士のもの『禅の研究』〕との比較はこの間に於ける我が国の歴史的社會情勢と、教育界の変遷に対して何ものかを示唆すると言えないであろうか。或る者はそこに卓抜な天才〔西田〕と凡庸な教師との対照をみとめるにすぎぬであろう。或る者はまた勃興期の秀才教育に対する戦時戦後の知的頹廢の兆候以外に何ものをも認めようとはしないかも知れぬ。さもあらばあれ、私は敢てそれがたとい進歩ではないとしても、少なくとも一つの発展であって、

⁽⁷⁾ 西田幾多郎の在職は1896年～1909年。

⁽⁸⁾ 西義之氏の証言である。『存在の解明』p155

必ずしも單なる退歩でなかったことを信じたい。善の研究が当時の四高生に十分に理解されたとは到底信ぜられない。私はその講義を通して博士のような畏敬をかしえなかつたであろうが、おそらく一層親愛されたことを誇りたい。⁽⁹⁾ 私の哲学教師としての理想はソクラテースにならつて哲学を雲の上より地上にひきおろすことであった。しかも着任の当時、一個のアカデミアンとしてアリストテレースの研究家にすぎなかつた私を一人の教育者としてソクラテースの道に向わせたのは、この八年間に接した若き学生諸君の活きた魂の求めであつた。それは決して青年に対する迎合を意味するものではない。私の着任当時は一般的思潮としてここに於ても國粹主義の駄法螺と詭弁が横行していたし、これと並んでとりわけ田舎につきもののお國根性から西田哲学の偶像的礼讃が流行していた。」としてこの没理性の渦中であつて、安藤先生はあくまで狂信と偶像礼拝を退けて合理性を護持し、自由の精神を培養することに専念された。

後年、筆者は安藤先生から金沢では、西田先生は神様のような存在であり、その批判をすると大変だったと聞いたことがあつた。その時は、このような背景を何も想像できなかった。狂信も偶像礼拝も根っこは同じで、眞の哲学を目指す先生に、一層厄介なのは「自分がとりわけ苦しんだのは、前者ではなくして、むしろ西田哲学の浅薄な口真似であつた。」のである。

信じやすい性格の筆者には耳の痛い話であつた。そもそも、安藤先生に学ぶきっかけが、当時、「完成した哲学者は、日本に二人いて、その一人が安藤先生」と聞いたからである。權威に従つて進路を決めていたのである。

先生が金沢の学生に要求されるのは理性的であること、批判力を持つことであつたが、先生を日本一の哲学者と偶像視する私は、狂信ではないがおよそ正反対の学生であつたと反省する。

「西田博士の講壇の後継者に課せられた課題は、皮肉にもこの莊嚴な形而上学の呪縛から青年の理性を解放する啓蒙の」授業であつた。「そこで、計画したものは、哲学史の正しい理解とともに、科学の実証的認識で、」前者は、「未曾有の國難狂瀾怒濤に翻弄される箱船のような学園の中にあつては、」「残念ながら、十分な成果は期待できなかった。」「私はもつと手近で的確なものを求める青年をせめることは出来なかつた。私は何よりも自らの教養の不足を痛感した。こうした内外の障害と欠陥に禍されて私の教育も徒に眼高手低の嘆きを重ねること数歳、我々は漸く終戦の日を迎えた。」

「虚脱と懷疑についてはもはや余りにも多く語られすぎた。しかし学園は流水のごとく清新な魂を送迎する。そして、青年の柔軟な心身は傷つくことも深ければ、その快癒の速さはまた眼をも瞠らせるものがあつた。私が望みつつ医しえなかつた理性の宿醉は痛烈な歴史の裁きによつて一撃のもとに除去された。私達は始めて白日のもとに相会し、弱い視力に頼りながら真理探究の王道を歩むことをうるに至つた。」

また、「終戦後理科の学生に教養としての哲学が課せられるようになった」ことは、「文科の学生に科学的常識を与えること」とともに、先生の年来の宿望であつた。「知識の畸型的成長が現代文化の最大の欠陥であり、歴史の悲劇の主要原因」というのが、先生の信念だからである。⁽¹⁰⁾

ここで、この書の成立の理由と過程が語られる。

「哲学と科学が緊密、不可分の緊密性を持っていた・・・古典ギリシャと近世前期のヨーロッパ」、「哲学が健

⁽⁹⁾『四十四年の夢』p271西田尚紀 活文堂 30年たつてもその克明な追憶に驚愕し、恐縮した。「安藤先生のような30年を経て尚学生を愛着するところを持つ先生になりたい」

康な機能を期して文化を支配した黄金期」そして「哲学がこの血縁をうとんじて独りその超絶をほこる時……科学が哲学に背を向けるとき……」哲学と科学の不幸な乖離をわが学界にみつめ、更に痛切に自己の知性の上にみつめた先生は、「私はこれまでに修得した哲学の知識を教授するよりは、新しく科学の学生たらんことを希つた。」

「私の哲学者としての関心と教師としての制約とは、科学の学習においてもおのずから異なる方法をとらしめざるをえなかった。私は自然と文化の両領域にわたる一般的な科学書をあれこれと手当たり次第に渉猟して、一つの総合的科学提要ともいふべきものを作成しようと企てた。これは指導者の欠乏と資料の不足と、何よりも私の基礎的学殖の欠陥のために極めて困難な課題であった。実を言えば私は今この雑駁な読書から辛うじて粗笨な拔萃を作り上げたととどまる。殊にそれぞれの領域の専門家が見られたならば、その理解の浅薄皮相みるにたえないもののあることをおそれる。」

資料の不足については、戦後新制大学に基本図書としての洋書をそろえるよう、尽力されたことが分った。後年ご自分の英文著書を国立大学中心においてもらったことは聞いていたし、洋書を自由に取り寄せられていたことはよく知っていた。ただ京都の洋書専門店で案内され、私が輸入方法を教えて作った店だと言われても、にわかには信じられなかった。国立大学の教員として公務員規則は遵守されたはずである。

ここで話をもどす。それにもかかわらずと、師は公刊の理由を知識愛だといわれる。無知の告白を通じて一歩でも前進の緒としたい念願からだという。「私は尚自分を極めて未熟な科学のディレクタントたることを自覚しているから、どのような無知の曝露をも敢て意に介するところではない。唯わたしが自分の知識を深めてゆく上には、たとえ不満足なものであつても……廣く諸家の教示を仰ぐ方が孤り暗中摸索を続けるよりは遥かに効果的な学習方法であると思うのである。」

「しかも敢て不遜のそしりをもかえりみずしていうことを許されるなら、私はこの無知がひとり私一個のことでなく、おそらくは社会いな学界一般の通弊であろうと推測する。一つの科学領域の中でさえ各自の特殊的専攻領域の外に出て、なお手さぐりし、よろめかない人が幾人あろうか。少なくとも私はこの粗笨な哲学序論⁽¹⁰⁾が旧制高校の文理科生にとって一つの存在理由をもったことを信ずる。今や全般的な学制改革によって旧制高校は新制大学

⁽¹⁰⁾ 理科甲類の卒業生「二年生になると、哲学が必修科目になる。先生は『アンテツ』と呼ばれて、生徒から一目も二目も置かれていた安藤孝行教授であった。この先生の講義は特徴があった。一学期間一貫して、そのテーマに密着した哲学的考え方を、歴史的に講義するのである。……一学期のテーマは『生物と無生物であった』古代ギリシャ哲学の形相から始まって、カントやデカルトを経て、アンテツの学説までたつぷりと解説を聞いた。…欧米の研究所長の訪問を受けて、農業研究管理に対する哲学的な話題を仕掛けられることが再々あったが、アンテツの講義のおかげで戸惑うことはなかった。自然科学の最先端に身を置きながら、年とともに、宗教心に親しみや落ちつきを感じていくのは、このアンテツの講義を受けたことが関係していると思う。」「中近東や東南アジアの研修生と宗教について語り、イスラム教を理解する『最高の紳士』として後日イスラム教国の政府高官の訪問を受けるなど、私はこの講義の恩恵を最大限に受けた者の一人であると思っている。いま思い返すと、旧制高等学校はものすごい全人教育をしていたと思う。」(小沢氏資料)

⁽¹¹⁾ 旧制高等学校生のテキストの目次をあげる。立命館大学のテキスト？ライフワークとなったもの(未完)と比較したい。

『総合科学としての哲学』近藤書店

1、物質 2、生命 3、心理 4、社会 5、文化 6、科学 7、観念形態 8、哲学

『存在の解明』行路社

1、有〔存在〕と無 2、存在と存在者 3、主観と客観 4、実在と現象 5、根源的存在
6、自然存在 7、物質と空間 8、生命と時間 9、精神と法則 10、歴史

に止揚された。……小著を世のあらゆる教養あり、教養を求める人々に贈ってその批判と研究の資に供し人類文化の一層深き理解と総合の道に手を携えて進みたいと思う。科学は日進月歩するが、哲学はともすれば永遠に反復回帰の観を呈する。しかし哲学がその自負するごとく絶対反省の体系であり、合理的世界観の設計であるならば轉變する自然と社会の諸現象に対し、日々新たとなる科学の経験知を媒介としなければならない。」

二十歳の決意、孤高の道は 自分で自覚し納得し覚悟する独自の自己実現の道をゆくことだったのある。

先生は、この姿勢を生涯持ち続けておられた。

昭和41年（1966年）刊の『エピクロスの園』（理想社）には「近頃私が外国語で著作する方針を取っているのは、一つには私の読者の人口密度が希薄なためである。私は狭い世界に多数の読者をうるかわり、広い世界の少数者に呼びかけようと思う」とあって、実際原文は英語である。英文の題は REFLECTINOS on GOD, SELF and HUMANITY で英語版の原文には ERNEST, OR ON GOD が入っている。すべて対話形式で書かれており、一話『ハムレット — あるか あらぬか』と『二話ピラト — 真理とは何か』が入っており、後者の聖書知識の豊かさに驚く。と同時に一般的な解釈を鵜呑みにしたりはしない。芥川が使ったのは共観福音書に違いないなどとは、教会でも、文学研究者からもあまり聴けない見識ではないだろうか。有言実行の人であり、この能動的・独創的人物像は人を育てる役割を担う人に、参考のできる一つのモデルではないかと思う。

先生はごく短時間に著作できる人である。このハムレット部分は英語で日赤入院中に書いたものである。それは晩年の芸術・文芸でもそうであった。一週間で何メートルもの雪舟の絵画の模写、ルバイヤートの詩の和歌訳は二日間の入院中の作品であるなど。「歌想湧きてやまず」なのである。

「その実績に対して明らかに不遇であった安藤氏の晩年のさびしい状況は」とは、師の翻訳再論を掲載した編集委員氏の弁であるが、先生は及川氏との議論をも大変喜び感謝しておられた。

旧制高校の寮歌祭もなくなって久しい。筆者は天才の学習過程のことをもっと掘り下げる必要を感じた。

「ボエティウスは絶大な学識と頭脳に恵まれていたが、不幸にして政治的嫌疑を蒙り非業の死を遂げた。もし彼が天寿を全うして、青年時代の計画を……完成していたとしたら、西欧の哲学はほぼ一千年の迂回を免れえたであろう」『存在の探求』 p 216 安藤先生の言葉が響く。日本哲学会の開催日、先生は逝かれた。

われもまた資料やかたを飾るべき遠き昔の影にあらずや

参考文献

- 西田尚紀『四十四年の夢』（1986・活文堂）
- 広田照幸「近代日本と学歴文化」（創文1994. 4月号）
- 白崎秀雄『当世畸人伝』（1987・新潮社）
- 古庄高編（神戸女学院大学総合文科学科）（2006・『女子教育、再考』冬弓舎）
- アリストテレス『範疇論、命題論』安藤孝行訳（1949・増進堂）
- シュリック『倫理学の諸問題』安藤孝行訳（1967・法律文化社）
- ジルソン『存在と本質』安藤孝行訳（1981・白雲山房）
- 岡潔・林房雄『心の対話』（1968・日本ソノサービスセンター）
- 和田修二他編『ランゲフェルト教育学との対話』（2011・玉川大学出版部）
- 松田高志「教育学の根本性格」（神戸女学院大学論集1982・第29巻 第2号）

大阪教育大学藝術講座「文語の苑」(大阪シンポジウム報告書2013・日本文化の継承と発信)